聖徳大学言語文化研究所論叢 12

聖徳大学言語文化研究所

ISSN-1346-857X

聖徳大学言語文化研究所　論叢　12

印刷　平成十七年二月十五日
発行　平成十七年二月二十五日

発行人　川並弘昭

編集　聖徳大学言語文化研究所
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

発行所　聖徳大学出版会
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

編集協力　（株）エサップ

©聖徳大学言語文化研究所

Printed in Japan

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK
本文用紙のみ100%再生紙を使用しております

聖徳大学
言語文化研究所
■
論叢 12

江苏工业学院图书馆
藏书章

はしがき

聖徳学園は、創立七十周年を迎えた平成十五年に、教育の質と環境への取組みのバロメーターであるＩＳＯ９００１（教育の質マネジメントシステム）とＩＳＯ１４００１（環境マネジメントシステム）とを同時取得しました。そのＩＳＯ９００１方針五誓の第五は「研究」の条であり、

研究のないところには、進歩はない。私達は、常に研究心を旺盛にして自らを陶冶し、もって資質の向上と能率の増進とを図り、学園の発展に寄与しなければならない。

と、研究の重要性をうたっています。

昨年度からすべての大学は、第三者機関による認証評価を受けることが義務付けられました。その点検・評価項目においても、「教育」という言葉は、多くは「教育研究」と「研究」という語句とタイアップして使われています。研究分野に対しての「21世紀ＣＯＥプログラム」と平行して、教育分野での「特色ある大学教育支援プログラム」が施行されています。

これらの事がらは、教育と研究が大学の両輪であり、研究の上に教育は成り立つことを示しているのです。

その研究を表に出している組織が、児童学研究所・生涯学習研究所、そして言語文化研究所の各研究所です。中でも言語文化研究所は、大学の開設された翌年の平成三年に最も早く設置されています。その時の設立趣旨の「世界の学界に向かって開かれた研究」「総合的視野に立つ研究」は今でも新鮮であ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り、『論叢』の「研究所総覧」に見るごとく、日常的に活発な活気ある活動を続けています。例えば研究発表会の「国際社会における交渉と言葉」や連続講座「ユーラシア文化の中の日本神話」などはかなり専門的内容で「21世紀COEプログラム」的ですが、講演会は地域市民社会への貢献を意識して、「松本清張」や「日本語教育市民ボランティア活動」なども取り上げているのは、「特色ある大学教育支援プログラム」的であろうと思います。

大競争の時代、大学の将来が研究所の研究成果にかかっているとの認識に立ち、言語文化研究所は、このような教育・地域市民を意識しての日常研究活動と並んで、本年度も研究成果を世に問うべく『言語文化研究所論叢12』の刊行となりました。

いずれの学問分野においても研究の細分化の現象を呈し、ともすると研究の意義や方向を見失いがちな現在、本論叢の各論文が設置趣旨どおりに、研究の本来の在り方を問うものであってくれることを願っています。

御笑覧の上、御叱責、御提言を賜ることができれば幸いに存じます。

平成十七年二月吉日

聖徳大学長　川並　弘昭

目

次

はしがき ……川並 弘昭 3
記紀万葉挽歌考
——ユーラシア葬送儀礼「慟哭・誄面」から ……山口 博 11
主語とモノ化現象
——いわゆる〈先言措定〉再考 ……北村 弘明 61
パウロの宗教哲学的素描 ……小川 修 93
ソクラテスにとって、他者とは何であったか ……茂木 和行 123
音の信仰
——妙音天をめぐる人と場 ……清水 眞澄 179
Binary Points of View and Classifications in English:
How English Speakers Recognize the World ……Kazuo Koike（小池一夫） 223
画の女
——画の論理が生産する女 ……李 哲権 247

19世紀のアメリカ中西部にみる二言語教育の成立過程
——公立学校のドイツ語教育に注目して ……西村　史子　361

言語、文化、研究
——舞踊文献研究の限界と可能性 ……市瀬　陽子　387

隠された信条
——二つのマリア讃歌と《怒りの日》に見る非キリスト教的性格 …坂崎　紀　411

ドメニコ・ダ・ピアチェンツァ『舞踊論』（1416）
Domenico da Piacenza／Dela arte di ballare et danzare, 1416. —その1
……監訳　川﨑淳之助
翻訳チーム　安広美智子
岸田　眞弓
佐藤　純　447

ハーディ文学の現代性
——「過去」と「現在」の併置が意味するもの ……藤井　繁　495

＊　＊　＊　＊

聖徳大学言語文化研究所総覧 …… 513
研究所構成員・研究所経緯
研究連続講演会・研究発表会
研究所講座記録
「論叢」総合目次 …… 551
あとがき――一点を選択 …… 山口　博 573

聖徳大学言語文化研究所・論叢　12

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

記紀万葉挽歌考
――ユーラシア葬送儀礼「慟哭・誄面」から――

山口博

はじめに

中華民国二十六年（一九三七）に刊行された瞿宣穎纂輯『中国社会史料叢鈔』二冊（上海書店）は、日本の『古事類苑』に類した書籍で、分量においては『古事類苑』とは比較にならない程の少量ではあるが、事項別に関係典籍本文が掲載されている便利な書籍である。

十一「喪紀」は漢代から唐に至る喪紀・喪儀・喪葬・祠墓・忌日・諱等の細目の下に、関係文献が列挙されている。その漢代喪紀・治喪に「送喪用挽歌」があり、挽歌の発生を論ずる時に誰もが引用する『文選』・晋崔豹撰『古今注』の一文が挙げられており、これがこの書籍における挽歌の初出であると共に、挽歌が漢代に生まれたことを示す史料である。参考までに、挽歌史において記念すべき両書のその記載及びそれ以後の史料を挙げておこう。

漢代之喪紀

治喪

送喪用挽歌。

文選注引譙周法訓、挽歌者、高皇帝召田横至尸郷自殺、従者不敢哭而不勝哀、故為此歌以寄哀焉。

古今注、至孝武時李延年乃分為二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之、世呼為挽歌。

南朝喪儀

送葬用挽歌。

御覧五百五十二引語林、張湛好於斎前種松栢、養鸛鶴、袁山松出游、好令左右挽歌、時人謂張屋下陳尸、袁道上行殯。

但挽歌為放達者所常奏。

御覧五百五十二引謝綽宋拾遺録、太祖嘗召顔延之、伝詔頻日尋覓不値、太祖曰、但酒店中求之自当得也、伝詔依旨訪覓、果見延之在酒肆、裸身挽歌、了不應対、

又引宋書、范曄夜中酣飲開北牖聴挽歌為楽。

又引梁書、謝幾卿与庾仲容或乗露車歴游郊野、酔則執鐸挽歌、不屑物議。

又引続晋陽秋、武陵王晞未敗四五年、喜為挽歌、自揺鈴使左右和之。

唐代喪葬

除上列之儀仗外有挽歌。

劉言史北原情、錯莫天色愁、挽歌出重閨、誰家白網車、送客入幽塵、銘旌下官道、葬輿去轔々、

蕭条黄蒿中、奠酒花翠新、冰雪晩霏微、墓成悄無人、烏鳶下空地、烟火残荒榛、

以上、引用されている資料により、挽歌の状況は理解出来るが、記紀万葉挽歌の表現法及びそれと密接な関係にある葬送儀礼と共通するものを見出すことは困難である。それは、引用されている例が、漢民族の手になる文字資料に傾斜していることに起因するのであるが。

それでは、まず記紀万葉の葬送儀礼及び挽歌の特色から考察しよう。

一　葬送儀礼としての「慟哭」

A　記紀万葉の「慟哭」

葬送儀礼で最も早く現れるのが、「慟哭」「哭泣」などと記されている行為である。記紀万葉時代を遥かに遡る倭国の葬礼を見るに、既に「哭泣」が記載されている。

始め死するや、停喪すること十余日、時に当りて肉を食はず、喪主哭泣し、他人は就きて歌舞飲酒す。

（『魏志』倭人伝・『通典』倭伝）

初喪に哭泣し、肉を食はず。

（『晋書』倭人伝）

後掲諸例から明らかなように、「哭泣」というのは、ただ悲しみ嘆くことではなく、「哭泣」という葬送儀礼であり、それが既に倭国の時代に行われていたのである。

記紀神話では、イザナミの死に際してのイザナギの慟哭がある。

乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きたまふ時に、御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木

本に坐す、名は泣沢女神。　（『古事記』）

と書く。次田潤は泣沢女神を泣き女と見、「葬式に哭女を雇う風俗は、今もなお満洲や朝鮮には残っている」と延べる[1]。

天孫降臨に先立って地上界に派遣された天稚彦が死ぬ。残された妻らが、

喪屋を作りて（中略）雉を哭女とし、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びたりき。（『古事記』）

とあることからも、次田が言うように、葬礼に「慟哭」という儀礼を行うための専業葬礼者「哭女」の存在は明らかである。

神話を離れて人の世の葬送儀礼として注目されるのが、『古事記』に記載されている倭建の死の儀礼であり、その時の挽歌四首は、「今に至るまで其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり」とあり、後世まで葬送歌のスタンダードナンバーとなる。挽歌だけではなく、その儀礼が後の葬送儀礼の典型と目されているのだが、その儀礼の一つが「哭泣」である。倭建の后たちは、

御陵作りて、即ちその地の廬附き田に匍匐ひ廻りて、哭きて為歌ひまして曰く、

廬附きの　田の稲幹に　稲幹に　匍ひ廻ろふ　野老蔓（葬歌1）

其の后と御子たちと、其の小竹の苅り杙に足跳り破れども、其の痛きを忘れて哭き追はしき。

守屋俊彦は「后の原姿は、恐らくこうした哭女なのであろう」[2]と言い、「哭泣」が単なる悲しみからのものではなく、殯宮儀礼であることを、西郷信綱は「紀では、殯宮儀礼としての奉哀・挙哀・哀哭・発哭・慟哭・発哀などをミネタテマツル・ミネスと訓んでいる。（中略）御哭（ミネ）であろう。この『哭為』も、后たちが儀礼としての哀哭を行う意である」[3]との認識を示している。

朱鳥元年九月九日に天武天皇崩御、

九月十一日、始めて発哀奉る。　（『日本書紀』同日条）

持統元年正月一日、皇太子公卿百寮の人等を率ゐて、殯宮に適まして慟哭奉る。

（『日本書紀』同日条）

天武殯宮儀式に頻出する「哭」「発哀」「発哭」も慟哭に同じ儀礼であり、「皇太子が諸臣を率いて殯宮で慟哭することは、伝統的喪葬儀礼、僧尼が殯宮に発哀する事は天武天皇においてはじめて見られる革新的な喪葬儀礼」と安井良三は指摘(4)、慟哭が儀礼であることはもはや明確である。

葬送儀礼としての「慟哭」は、挽歌にも歌い込まれる。

若き子の匍匐徘徊り朝夕に哭のみそ吾が泣く君なしにして　（『万葉集』巻三・四五八・余明軍）

大伴旅人没に、声挙げて泣く資人余明軍の歌である。儀礼としての「慟哭」を突き抜けるように、込み上げてくる悲哀からの哭泣がうかがわれる。

磯城島の　大和の国に　いかさまに　思ほしめせか　つれもなき　城上の宮に　大殿を　仕へ奉りて　殿隠り　隠り在せば……召し賜はねば　剣刀　磨ぎし心を　天雲に　思ひはぶらし　展転び　ひづち哭けども　飽き足らぬかも

（『万葉集』巻二・三三二六・作者未詳）

大伴家持も安積皇子挽歌で、

かけまくも　あやにかしこし……逆言の　狂言とかも　白栲に　舎人装ひて　和豆香山　御輿立たして　ひさかたの　天知らしぬれ　展転び　ひづち泣けども　せむすべもなし

（巻三・四七五・大伴家持）

と歌う。この二首の「ひづち泣く」は、泣き濡れる状態であり、葬送儀礼「慟哭」の和語と考えてよいであろう。瀬古確は「『ひづちな』くと言ってゐるものもあつて、ここには『展転』と組合せられて一入その慟哭の激しさを歌ひ上げてゐるのが見られるのである」(5)として「激情の表現」と言うが、それは正しい認識ではなく、葬送儀礼の和的表現なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com